

II 特別連載 II

※現在、さくらサイエンスプログラムは新型コロナウイルスの感染防止のため、海外からの招へいプログラムは実施していません。

科学技術  
振興機構

『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第262回

芝浦工業大学の活動報告



清水郁郎  
(芝浦工業大学  
建築学部建築学科教授)

現代都市居住における  
ランドスケープピング手法研修

■ 緑に住まう

芝浦工業大学建築学部では、2020年2月21日から3月1日まで、タイ国立メジョ1大学建築環境デザイン学部から教員1名と学生7名、チェンマイ大学から教員2名と学生6名を招聘して、国際交流プログラム「現代都市居住におけるランドスケープピング手法」とくにグリーンインフラの研修」を実施した。都市の暑熱化が世界的に問題になっている現在、街路樹や公園などによるグリーンインフラの整備は有効である。本プログラムでは、東京でグリーンインフラの先進事例の実際を緑地公園や親水公園、環境共生建築などの生態環境利用に着目しながら研修した。

招聘した両大学は、北部タイで栄えたランナータイ王国の王都チェンマイにある。チェンマイは、モンsoonアジアの生態系に根ざ



設計作業の風景



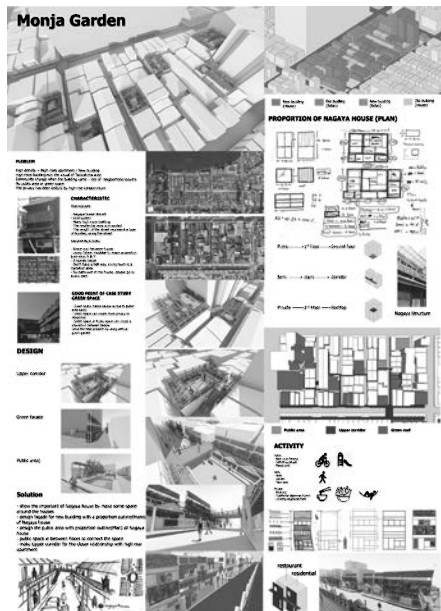
発見した課題をプレゼン

■ プログラムの成果

はじめに、グリーンインフラの整備方法や緑化によるランドスケープの事例を実見した。豊洲などの人工的緑化が進んだ東京湾岸エリア、大手町につくられた自然林の大手町フォレスト、壁面や屋上の緑化の先進事例で

した往時の王権都市としての美しい姿を保ってきた。しかし、近年、水濘や灌漑、緑地などの豊かなグリーンインフラを持つ王都の至るところで激しい観光開発が進む。一方、周辺や郊外では伝統的な水稲耕作からコーン等単一換金作物栽培への生業転換が進み、焼畑による煙害、水質汚染、文化的景観の激変

プログラム	1日目	日本到着、ホテルチェックイン
	2日目	<AM>オープニングセレモニー、各大学教員による講義 <PM>課題対象地となる六本木、大手町、月島・門前仲町などの予備調査 歓迎会
	3日目	大手町エリアの ランドスケープピング・グリーンインフラの調査、見学
	4日目	<AM>都内の商業、文化施設の緑化手法の調査、見学 <PM>新橋界限における大規模ウォーターフロント開発地の見学 横浜港大棧橋の見学
	5日目	東京湾岸の親水地域における景観、生業、居住空間の把握
	6日目	月島におけるデザイン・サーヴェイ
	7~8日目	デザイン・サーヴェイに基づく新しい緑化手法の提案作成
	9日目	<AM>最終成果発表会 <PM>ランドスケープピング、グリーンインフラ に関するエクスカーショ
	10日目	チェックアウト、空港移動、日本出発



最終講評会(芝浦工業大学豊洲キャンパス)

ある東京駅グランルーフや日比谷ミッドタウン、六本木ミッドタウンなどを訪問した。タイの学生たちにとっては、最先端の大規模商業施設がデザイン的にも美しい緑地を屋上に作ったり、大規模な壁面緑化を実施していたりするあたりが興味深かったようである。

次に対象にしたのは、水城と親和するデザイン手法の習得である。東京の沿岸部では、水と親和性の高い居住文化が発達してきた。現在までその風情が残り、近年は多くの親水公園が整備されている江東区古石場や木場、門前仲町、中央区佃島などを巡検した。チェ

ンマイでも現在まで水濠が残されており、炎暑の時期には緑陰が人々に安らぎを提供する。両国の親水空間を比較することもこの巡検の目的である。

さらに、最終成果につながる実習として、高密度集住地区である中央区月島におけるランドスケープングをサーヴェイし、それに基づいたグリーンインフラのデザインと都市緑化手法の提案を行った。学生たちは日タイの混成グループをつくり、グループごとに路地のある月島で町並みと住宅をサーヴェイした町並みと住宅それぞれについて3つずつデザインリソースを探索し、それを実際の提案に取り込むという課題とした。丸1日をかけてサーヴェイの後、早朝から深夜まで、2日をかけて、各グループはデザイン案を作成した。共通言語の英語を使い、どの班でも積極的に自分の意見を述べ、ディスカッションする光景がみられた。各班の提案は完成度が高く、2日という作業時間を考えると、学生たちは個々の力をよく集約させ、密度の濃い提案を作成したといえる。離日前日の午前中には、各グループによる成果発表会を実施し、教員や学生たちで活発な意見が交わされた充実した発表会となった。

■ 交流の意義と今後の展望

本プログラムは異文化理解を踏まえた建築の実習だが、机上を離れて実際の現場で課題を発見し、その解決案を考えるという点で、PBL (Project Based Learning) のような実施例にもなった。それはタイの大学教員も同様に感じていたようで、実りの多い経験だったとの評をいただいた。こうした活動を介して、両国の大学間でより強く連携していけることが理想である。

今回のプログラムの実施時期は、新型コロナウイルスの感染拡大初期にあたり、実施も危ぶまれたが、本学事務部門の周到な準備と学生、教員の細心の注意により、結果的に成功に導くことができた。私はこれまで、両大学

学生の成果「月島の民家屋上を緑地べランダとしてつないで開放し、回遊するためのデッキを張り巡らせた案」という案をめぐって、両大学から「次はチェンマイで」といわれたのだが、コロナ禍によって今日に到るまで実現できていない。学生のためにも、また、大学間の連携強化のためにも、早くPBLが再開できる状況になることを願う。